

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

善連法彦と『土耳其行紀事』

著者	奥山 直司
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	49
ページ	81-65
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007389/



善連法彦と『土耳其行紀事』

奥 山 直 司

はじめに

筆者は先に「明治インド留学生たちが見た『比叡』と『金剛』の航海」[奥山 2009]において、明治のセイロン（現スリランカ）留学僧、小泉了諦（1851－1938）と善連法彦（1865－1993）によるトルコ行の概要を、彼らが残した二つの手記、すなわち小泉の『西游見聞記』[1893]と善連の『土耳其行紀事』（稿本、福井市仏照寺所蔵）を主たる資料として明らかにした。この両手記は、1890年9月に熊野灘で遭難したオスマン帝国の軍艦エルトゥールル号の生存者69人をイスタンブルまで送り届けることを使命とした日本海軍の練習艦「比叡」と「金剛」の航海を、コロンボから便乗した日本人僧侶の眼を通して見た貴重な記録であり、近代における日本仏教徒とトルコのイスラーム教徒との接触の事例としても興味深い記述に満ちている¹。

前稿に続いて本稿では、善連に焦点を絞り、イスタンブルに向けて出発するまでの彼の経歴を明らかにするとともに、『土耳其行紀事』からイスタンブルにおける見聞記録を抜き出し、そのテキストを提示する。

1. 善連法彦の経歴

生い立ちと学習²

善連法彦は、1865（慶応元）年³、越前国足羽郡南守江村（現福井市）にある真宗仏光寺派仏照寺に同寺の第19代住職法護（1912没）

の長男として生まれた⁴。幼名は詳らかではない。彼は、1876（明治9）年1月に出家して、法彦の法名、三英の号、宏達（こうた）の字を与えられた⁵。少年期の善連について、仏照寺には、乗馬でも水泳でも、何をやらせても上手だったという口伝が残っている。1882年、彼は京都の仏光寺学寮の預課に入って宗学を学び、1884年には大阪府嶋上郡富田村（現高槻市）の行信教校に入学した⁶。だがまもなく東京に遊学したらしく、仏光寺勸学院寮長を務めた時期もあったようである⁷。1887（明治20）年9月、井上円了（1858－1919）によって東京に哲学館が開かれると、彼はその第1期生となったと考えられる⁸。

このように各地を巡る学習形態は、当時の有為の日本青年にとっては決して珍しいものではなかったが、善連の場合、その原動力の一つが浄土真宗大谷派の学僧南條文雄（1849－1927）から受ける学問的な刺激にあったことは想像に難くない。英国に留学してオックスフォードのマックス・ミュラー（F. Max Müller, 1823－1900）の下で研鑽を積み、『大明三蔵聖教目録』の訳補（Oxford, 1883）を始めとする華々しい研究成果を土産に帰国（1884年）した南條が日本仏教界に与えた影響はただでさえ大きい。加えて善連は、南條とは年齢こそ違え、親戚同士の関係にあった⁹。親族の中に海外遊学で名を上げた著名な仏教学者のいることが善連の進路に与えた影響は小さくなかったと考えられる。実際、南條は、1888年2月に善連が生田（織田）得能（1860－1911）と共にシャム（暹羅、

現タイ国)の都バンコクに渡るのに重要な役割を演じる。二人がシャムに出かけるまでの経緯を、生田がシャム留学を決意する時点まで遡って明らかにしよう。

鹿鳴館の夜一日タイ仏教徒の交流の始まり

日本とシャムとの間に正式な国交が結ばれたのは、1887(明治20)年9月26日に調印された「修好条約ニ関スル日本国暹羅国間ノ宣言」¹⁰によってである。翌1888年1月、シャム国特命全権大使プラヤー・パーサコーラウォン(Phraya Phatsakorawong¹¹, 1849 - 1920)が来日し、同月23日に批准書交換が行われた。

公式行事も一段落した2月10日の夜、パーサコーラウォン大使を滞在先の鹿鳴館に訪ねた僧侶の一人団があった。浄土真宗本願寺派の島地黙雷(1838 - 1911)、浄土真宗大谷派の寺田福寿(1853 - 1894)と平松理英(1855 - 1916)、そして英語通訳を引き受けた本願寺派の今立吐酔(1855 - 1931)の4人である。その目的は、外交関係の樹立を機に、両国間に宗教(仏教)上の交際を開くことにあった。

仏教国シャムの貴族だけに、大使は日本の仏教に強い興味を持ったようで、会談は3時間に及んだ。翌日、浅草本願寺を参詣した大使から、接待委員の松平忠礼(1850 - 1895)を通じて、「今夜更に来訪ありたき旨」が伝えられ、島地・寺田・平松はその晩再び鹿鳴館の門を潜った。この日の通訳は大谷派の徳永(清沢)満之(1863 - 1903)が務め、平松の実弟大河内秀雄(生没年不詳)が会談内容を速記した[明教新誌 1888c]。

互いの仏教に対する問答の形で進められたこの2度の会談は、日タイ仏教徒の近代における初の本格的な接触として極めて興味深い¹²。当面の課題にとって重要なのは、この時大使が、日本からの留学生の受け入れを約束したことである。すなわち、初日の会談の中で平松理英が、「将

来両国間ニ宗教上ノ通信ヲ開ント欲ス。貴国何ノ地何某へ通信スベキヤ。閣下之ヲ示セ」と尋ねたのに対して、大使は次のように答えている。

我国大僧官ハ皇族ナリ。余帰朝ノ上大僧官ニ上申セバ満悦ナルベシ。其上ニテ信路ヲ開クベシ。且現今世界中ニテ帝王ノ厚ク仏法ヲ護持スルハ弊邦ヲ最トス。故ニ貴国ヨリ青年僧侶ノ英語ニ通ズル者ヲ游学セシメバ好都合ナラン。尚南北仏教ノ異同ヲ比校スルハ大利益アルベシ。[令知会雑誌 1888b: 126(句点・濁点引用者)]

さらに翌日の会談では大使は次のように約束した。

若弊邦へ留学生ヲ遣ラレナバ充分ニ保護ヲ為シテ学バシメン。又学校ニ入ントナラバ皇帝ヨリ保護セラレタル学校へ入学セシメン。弊邦ニテハ何宗旨ヲ奉ズルモ更ニ之ヲ束縛セズ。朝鮮、安南、支那地方カラモ来テ居ルナリ。[令知会雑誌 1888f: 189-190(句読点・濁点引用者)]

この約束は、翌日、哲学館で仏教史を講ずる大谷派僧侶生田得能が、寺田から話を聞いて即座にシャム留学を決断することによって、早くも実現に向かって動き出す¹³。生田がこのような決断をしたのは、前年、自らが編集人を務める『令知会雑誌』に書いた論文[生田 1887]の中で当今の仏教を南部、北部、東部の三部に分けて論じた頃から、三部の仏教を実地に視察して比較することを望んでいたからである[生田 1891: 12]¹⁴。その生田にとってこの留学話は、文字通り渡りに舟であった。生田は大使に面会して同行の承諾を得ると、本山から留学許可を取り付けるために寺田に付き添われて京都に向かった[明教新誌 1888e]。

バンコク渡航の経緯

島地等の大使訪問と生田のシャムへの留学話は、隔日発行の仏教新聞『明教新誌』等に報じられたこともあって、かなりの反響を呼び起こしたようである。善連もこれに刺激を受けたことは想像に難くない。善連にとって生田は、同じ越前出身の真宗僧侶であり、講師と生徒の違いこそあれ、哲学館に身を置いた者同士である。さらに、この時期京都にいた善連は、南條等から大谷派内部の生田留学の情報を聞ける立場にあった。その彼がシャムへの同行を決意した経緯は次のようである。

2月19日、パーサコーラウォン一行7名は横浜から船で神戸に向かった〔令知会雑誌 1888c〕。2月21日、南條が京都から神戸の兵庫ホテル (Hiogo Hotel)¹⁵ に大使を訪ねてきた〔令知会雑誌 1888h〕。大使一行には翌日から京都見物の予定が組まれており、南條の訪問は奉迎を兼ねた表敬訪問であったと思われる。大使は南條との面会を喜んだに違いない¹⁶。というのも、大使は、先の鹿鳴館での会談の折に南條の名声を聞き、南條がマックス・ミュラーと共に校訂出版した梵文『無量寿経』(Oxford, 1883)も贈られていたからである〔令知会雑誌 1888f〕。また大使は南條と同様、英国留学の経験の持ち主であった〔石井監修、石井・吉川編 1993: 266〕。

この時、南條には善連が同行していた。その状況を明かすのは、善連が南條に送ったバンコクへの航海日誌〔令知会雑誌 1888h〕である。これによると、善連は「曾て錫蘭に渡航し印度内地に漫遊し仏教の遺跡を搜尋し巴利梵文を講習せんとする宿願」を持っていた。それが一転してシャム留学を決心したのは、「傍ら暹羅仏教現時の形況を聞き充分同国の巴利貝文研究に適するを知り南條師の紹介によりて大使の留学を保佑せらるゝに逢」ったからであるという。翌日善連は京都に戻って、大谷派の渥美契縁(1839－1906)の家で生田に会い、その足で帰郷している。生田が「自伝」[1891: 13]に

記す「偶善連法彦氏来りテ同行ヲ約ス」とはこの時の出来事と考えられる。

生田のシャム留学は、思い立ってから2週間余りで出発という慌ただしいものであったが、善連の場合はこれに輪を掛けている。ただし、彼の留学に関しては、もう一つ考慮すべき点がある。それは、彼がセイロン留学中に使用した1890年の日記帳(仏照寺所蔵)の余白に書いたメモである。それによれば、彼は1888年1月3日に東京から京都に赴き、1月15日に父法讓から学資として400円を得ている。400円といえば大金である。同じメモによれば、彼は出航当日の2月28日に本山仏光寺から学資200円を得ているが、これは留学の補助金として理解できる。彼がまだシャム留学の話など影も形もなかった時期から行動を起こし、父親から多額の学資を得ているのはなぜであろうか。先に引用した彼のセイロン・インド留学の抱負を考慮に入れば、およそ次のように考えられるのではないだろうか。善連は、初めはパーリ語の研究等を目的にセイロン留学を計画し、そのための資金も用意していた。当然のことながらそこには、セイロン留学の先駆者である真言宗の釈興然(1849－1924)と臨済宗の釈宗演(1860－1919)の影響がある¹⁷。ところが、南條とパーサコーラウォンの慫慂を受けて彼は計画を変更し、同じ目的のためにシャムに向かうことにした、と。

2月22日、パーサコーラウォン大使一行は京都に入り、円山の也阿弥楼(也阿弥ホテル¹⁸)に滞在して、翌日、八坂神社、東西本願寺、御所、二条離宮(二条城)などを見学した。東本願寺では寢殿において、南條の通訳で法主大谷光勝(1817－1894)、新法主大谷光瑩(1852－1923)らに面会した。この席で法主は大使に「今般我か学生生田得能を貴国へ留学せしむるに就ては万事周旋あらんことを希ふ」と挨拶している。折しも東本願寺では、元治元(1864)年の禁門の変で焼失した両堂(御影

堂と阿弥陀堂)の再建工事中であった。その現場を視察した大使が特に注目したもの一つは、巨材の引き綱に使われている人髪綱(毛綱)であった。大使は、「是は到底老婦のみにて出来得べきにあらず定めて妙齡の子女が愛惜する所の緑雲を断つて寄附せしならん」と感嘆の声を上げた¹⁹。大使の帰国後、シャム王から東本願寺に再建用資材としてシャム産の紫檀木数本が寄贈された〔令知会雑誌 1888k〕。

他方、善連は2月26日に郷里を発ち、翌日、大谷派録事白尾義夫(生没年不詳)の見送りを受けて生田と共に京都から神戸に向かい、兵庫県庁で旅券の交付を受け、夜、兵庫ホテルに大使を訪ねた。翌28日午前11時、大使一行と生田と共に上海行きのフランス郵船に乗り込んだ〔令知会雑誌 1888h〕。

バンコク滞在

帰国するパーサコーラウォンの一行に山本安太郎(1872-?)と山本銀介(?-1897)という日タイ交流史に名を残す二人の少年が加わっていたことは比較的よく知られている。等閑に付されているのは、むしろ生田と善連の渡航の方である。安太郎は福島県人で、東京築地のサンマー英語学校で学んでいたところを、日本の少年を連れ帰ってシャム語とシャム事情に精通させたいという大使の希望を叶えるために選拔され、銀介は名古屋出身で、神戸で店員をしていたところを大使自身によって見出されたと言われている〔石井・吉川 1987: 212〕。上海への船中で善連は銀介(ただし新介と表記)に会っている〔令知会雑誌 1888h〕。当然安太郎も同じ船にいたはずである。

一行の乗った船がチャオプラヤー川を河口から20マイル遡り、バンコクの外務省公館前の船着き場に到着したのは3月21日の正午頃であった。その日の明け方、船上から川上に仏塔が林立しているのを初めて目にした生田は、思わず「盤谷は宛然たる一箇の祇苑(祇園精舎)なり」〔令知会雑誌 1888g: 236(括弧内引用

者)〕と叫んだという。

二人の山本はトンブリー地区にあるパーサコーラウォンの広大な邸宅に住んで、王侯貴族の子弟が通うスワンクラブ校にパーサコーラウォンの息子と一緒に馬車で通学し、夜は家庭教師に就いて語学を学んだ〔石井・吉川 1987: 212-213〕²⁰。パーサコーラウォンが島地らにした約束を想えば、生田と善連もこれと同等の待遇を受けたと考えてよい。

生田は、彼自身の言葉によれば、「英書ヲ介シテ暹書ヲ読ミ、暹書ニ依テ以テ南部仏教ノ綱要ヲ知ル」〔生田 1891: 13〕ことに努力した。また上座部で出家して僧院生活を送ったこともあるらしい。浅野〔1938: 6〕によれば、彼がいた僧院は「ワット・ピチャート」、すなわちパーコーラウォン邸にも近いワット・ピチャイヤートであるという。

ところが善連は生田とは違った道を選ぶ。彼のシャム留学の目的は、彼が釈迦牟尼の原語と考えていたパーリ語を修得することにあつた。ところがバンコクに着いてみると、シャムではシャム語を覚えた後でなければパーリ語は学べないという。シャム語を3、4年も学んだ後にパーリ語を学ぶというのは、いかにも待ち遠しくてならない。それにシャムでも、パーリ語を学ぶにはセイロンまで行く位であるから、シャム人にすら難しいものをここで学ぶのは不利益である〔善連 1891a〕。こう考えた善連は、バンコク滞在を5ヵ月足らずで切り上げ、生田と別れてセイロンに向かった。元来の計画に戻ったのである。

セイロンへの転学

途中シンガポールに1週間ばかり滞在した後、ペナンを経由してコロomboに到着したのは1888年8月9日のことであつた²¹。善連はコロombo仏教神智学協会に寄宿して、釈興然のいる仏教学院ウィドヨーダヤ・ピリウエナ(Vidyodaya Pirivena, 知昇学院)に入学し、学院まで2マイルの道のりを俗服で通学しはじ

めた。善連は釈興然・釈宗演に次ぐ3番目の日本人セイロン留学生であった。

この年の12月、浄土真宗本願寺派の東温護(1867-1893)がセイロンに留学に来た。翌年6月には、訪日したオルコット(Henry S. Olcott, 1832-1907)とダルマパーラ(Anagārika Dharmapāla/ Don David Hēvāvitāraṇa, 1864-1933)に伴われて、本願寺派の徳沢知恵蔵(1871-1908)、浄土真宗誠照寺派の小泉了諦、大谷派の朝倉了昌(1856-1910)、本願寺派の川上貞信(1864-1922)がコロomboに着き、セイロンの日本人留学生は都合7人となった。彼らの留生活については、奥山[2004]がその概要を述べた。このことについては別途さらに詳述する機会を得たいと思う。

ここで指摘しておきたいのは、1890年頃から、彼らのうち特に真宗僧侶の間からインド・チベットを目指そうという動きが起こることである。善連もそのうちの一人で、小泉と共にインドに入り、ネパール、カシミール、チベットを経て日本に帰るという壮大な旅を構想していた²²。

こうした動きを促進したものの一つは、同年7月10日発行の『反省会雑誌』の巻頭の社説「印度留学の諸兄に望む」[反省会雑誌 1890a]である[Okuyama 2008: 215]。彼ら留学生に対して梵語・パーリ語で書かれた大乘経典の原典の探索・収集の必要性を訴えたこの記事は、実は、この年の3月30日に欧州留学の途中でコロomboに寄港し、留学生たちと懇談した高楠順次郎(1866-1945)が、おそらくは欧州行きの船中で書いたものであった。しかも、高楠はその原稿をまずコロomboの東に送り、添削と反省会への転送とを依頼している。そのことを明かすのは、『東温護日記』(稿本、宇城市円光寺所蔵)の1890年4月25日の条に書かれた次のくだりである(括弧内引用者)。

沢井(高楠順次郎)ヨリ印度留学生ニ望ム

テウ一文ヲ寄送シ添削ノ上反省会ニ転送ノコトヲ依頼シ来レリ蓋シ該状ハスエスヨリ投函シタルモノ也

実際に東が高楠の原稿にどの程度手を入れたかは分からないが、高楠がコロomboで東・善連等から聴取した意見を十分に踏まえてこれを書いたことは確かであろう。その上で高楠は彼らの行動に意義と方向付けを与えたのである。このようにして、明治の「西天取経劇」の幕が開く²³。

ところが、この年11月16日朝、コロombo港に「比叡」と「金剛」が入港し、この両艦に便乗してトルコまで行く布教師に小泉と善連が選ばれたことによって、二人の運命は大きく転換することになる²⁴。

2. 善連法彦が見たイスタンブル —『土耳其行紀事』より

善連法彦の『土耳其行紀事』は、縦20.5cm、横16cmのノートブックに漢字片仮名交じり文で縦に左から右へと90ページにわたってペン書きされている。このノートには丁付がなく、以下に用いるページは筆者が仮に付したものである。

『土耳其行紀事』は、「比叡」と「金剛」がコロomboに入港した1890年11月16日から二人がイスタンブルで両艦と別れる前日の1891年1月16日までの日録である。このノートにはさらに雑録・旅行経路図・抜き書きなどが附載されている。

以下に提示するのは、『土耳其行紀事』から善連のイスタンブルでの見聞記を抄録したものである。その目的は、善連がイスタンブルで何を見聞きし、トルコ人たちとどのように交流したか、つまり善連のイスタンブル体験をこの手記の文章そのものによって明らかにすることにある。

なお、彼がこの手記の随所に書き付けている

漢詩や和歌は、彼の時々的心境を推し量る上で重要であるが、今回は紙幅の都合で割愛した。またトルコと直接関係しない使節団の内部事情や個人的出来事も省略に付した。

テキストは日毎に分け、内容に即して小見出しを付した。ローマ字表記のトルコ語の綴りには疑問点が多いが、そのまま採録してご批正を仰ぐことにした。また、善連の報告内容に関する解説や注記を付すことは差し控えた。これらの点については今後研究を進めたい。

凡例

- 1 漢字は原則として新漢字を用い、仮名は現行の片仮名を用いた。
- 2 仮名遣い、送り仮名は原文のままとした。
- 3 読みやすさを考えて、句読点・濁点を補い、また適宜改行した。
- 4 誤字・当て字の場合は正しいと思われる字を〔 〕を付して傍注した。
- 5 疑問の場合は〔カ〕を傍注した。誤りと思われるものをそのままにする場合、和文には〔ママ〕を傍注し、ローマ字には(*sic*)を付した。
- 6 □は判読不能文字を表す。

1月2日(金) (pp.51-52)

イスタンブル到着と遺族たちの船

午前一時雙艦君士丁底堡近傍ニ着ス。灯台ノ傍ニテ夜ノ明ルヲ待ツ。六時接待艦来テ先導シ徐ニ四方ヲ望ミツゝ進ム。此日雪花霏々トシテ降り満眼惣テ銀世界。山モナシ。家モナシ。唯見ル、富士山ノ寝タル顔。当番ニ非ラザル人モ各艦上ニ群リ来リ、一領ノ単衣、寒氣ニ手足ヲ震ハシ乍ラ四方ノ景色ニ見取ラレシ。

午後二時、Damabakcha 王宮ノ傍ニ来テ両艦碇泊ス。幾千ノ端船ハ我等ガ舟ヲ囲ミ望見ス。貴紳ノ士女多ク悲愴ノ顔光ナルハ思フニエルトグロール沈没ノ際溺死サレタル士官將校杯ノ遺族ナリシト聞ク。祝砲雷ノ如ク轟キ、白烟雪ヲ消ス。此辺ノ風光甚ダ佳シ。此首府三大区ニ分レ、王宮ノアル地ハ是ヲ Galata ト云ヒ、二大

機橋ヲ渡リテ南西ニアルヲ君須丁底堡ト云。マタ東南ニアルヲ Viskazal ト云フ。此三大区ヲ合シテ一府トス。

贈品の引き渡し

九時、上陸セシ理坐候再ビ比叡ニ来リ日ク、予ハ日本天皇ノ厚意ヲ土耳其皇帝ニ奉奏ス、且ツ日本天皇ヨリ贈セラルト聞ク宝剣其他ノ物品ヲ我皇ハ亟ニ是ヲ見ンコトヲ渴望セラル、我等強テ明朝ヲ待テ是ヲ宮闕ニ将来スベシト奏セシモ、雙艦已ニ宮闕ニ近シ、夜分ト云ヘドモ何ゾ至難絶望トスベキニ非ズ、朕ハ是ヲ見ズシテ寝ニ就カズ、汝等迅ニ行キ請ヒ来レト嚴勅アリ、願クバ是ヲ渡サレタシト。仍テ少議ノ後遂ニ同氏ニ渡セリ。其後マタ急使来リ、是ヲ督促セントセシモ已ニ伝送ノ後ナリシ。

1月3日(土) (pp.53-54)

写真技師(灰土耳伯)の家を訪ねる

船ヲ得テ金角港ノ右岸ニ着シ、我羅他街ヲ経テ、写真技師ノ家ヲ訪フ。是技師ト旧約アルニ拠ル。家嬢生等ヲ引テ客室ニ通ス。室ハ欧土折衷ノ風アリ。高キ寝台ノアルハ欧ノ如シト云ヘドモ、広キ蒲団ヲ拵ゲタルハ日本ノ如シ。火鉢アリ、手ヲ温ムベシ。香珮アリ、呑ムベシ。香珮ノ茶碗ハ日本ノ煎茶之碗ヨリモ少也。盆ニ拵タル様、真ニ日本ト異ナラズ。此地ノ習慣ニシテ吾邦ト同様ナルコトニシテ足ラズ。老翁出テ来リ日ク、我子息ハ命ヲ君等ガ恩恵ニテ拾ヒタルモノナリ、何ヲ以テカ是ヲ謝セン、今日ハ子息宮闕ニ召サレ、君等ヲ見能ハザルハ遺憾千万也ト。白髪頭ニ冠シ袈衣肩ニアリ。挙動頗ル奇異ナルヲ覺ヘタリ。

モスク訪問

是ヨリ小泉師ト Bospolas 浜ニアル球院、即回教ノ Mosque ニ至レリ。住僧処々ニ案内シ、其説明ヲナシ、且云フ、日本僧ニ遇ヒシハ今ヲ以テ初メトス、我等ガ喜ビ何ゾ窮ランヤト。談話限りナシト云ヘドモ時ニ限りアリ。愛ヲ割テ五時船ニ帰ル。

1月4日(日)(pp.55-56)

トルコの軍艦に迎えられる

早朝比叡ヲ訪フ。小泉師ハ先已ニ便船アリ陸ニ行クト。仍テ予モマタ陸ニ至リ、同師ヲ索ルニ逢ハズ。仍テ昨日ノ約束ニヨリ、灰土^{ママ}伯ノ家ヲ訪フ。伯種々必用ナル談話ト香^{ママ}琲ヲ供セラル。伯マタ宮闕ノ召ス処トナリ、少時ニシテ去ル。野田正太郎氏、小泉師ハ我艦内ニ我不在ヲ訪ハレ、更ニ伯ノ家ニ来ラル。仍テ三人同道シテ阿地不艦長ト共ニ氏ノ軍艦ニ迎ヘラル。惣テ^土土耳其ノ軍艦ハ金角港ノ西ニ入り停泊スベキ筈ナレドモ、我雙艦ヲ護^{ママ}□ノ為メ其中央ニ来テ停泊シ居レル也。

市街地探訪

夫ヨリ一時間ノ後奈伊伯等ト共ニ君都ニ航ス。諸市街ヲ一見シ、衣服店ニ入り、野田氏等ト共ニ必用ノ物品ヲ需メ、阿地不艦ニ帰ル。我ハ小泉師ト共ニ賀羅多街ニ出デ、宮闕中ノ寺院ニ詣ル。^{ママ}粧嚴麗美意外ニ出ズ。英人 Champ 氏ト共ニ処々ノ離宮ヲ巡リ、五時帰船ス。

皇帝の勅使

今日ハ土帝ノ勅旨ヲ奉ジテ特使来リ、艦長ハ王宮中ニ便室ヲ与ヘラレ、十二名ヲ限テ夜士官ノ宿泊スル処ヲ設ケラレ、雙艦ヨリ六、七名宛、是非一日兩度宛宮中ニテ饗応アルベシトノコトヲ通ズ。

勲章を巡る議論

勲章ノコトニ付大議論起ル。何故ナレバ土帝ハ今度正副長、航、砲、分等ノ諸士官ニ数種ノ勲章ヲ送ルベシトノ勅ヲ發セラル。仍テ軍医長、機関士、教官杯ニハ賜ハラザルコトニナル。此辺ノ差別ハ土耳其ノ習慣ニ基キタルモノナリ。然ルニ一般ノ士官、我邦ニシテハ何ノ區別モナシ。甲ハ乙ノ為ニ請ルヲ氣ノ毒ト思ヒ、乙ハ擯斥セラレタリトテ怒ル。我ハ其両間ニ交テ調和ノ方法ヲ謀ル。浮雲ノ名譽モ軍人ノ習慣ニテハ実ニ確乎タル生命ナレバ、甚ダ難カリシ。容易ニ和解シ円滑ナルハ殆ンド望外ノ觀アリシ。

皇帝の優遇

晩式部長 Homako Pasha ニ逢フ。土帝ハ十

分ナル賓客ノ礼ヲ以テ日本ノ軍人ヲ接待センコトヲ□ハル。日々用スル処ノモノハ、石炭、水、野菜、牛肉、豚肉、鶏肉、七面鳥其他万般ノ品ニ至ル迄、毎日宮闕ヨリ此雙艦ニ送クル命令ヲ發セラレシト聞ケリ。

土帝ハ二世 Abdul Hamid ト称ヘ、今年四十九歳也。七人ノ子女アリ。六人ノ兄弟ヲ持チ□リ。帝ノ兄ハ今ヨリ十九年前王位ヲ廢セラレタル故、其時今帝即位セラレタルナリ。而シテ君土須底堡^{凱旋カ}ノ□戰ヨリ廿八代ノ王位ニシテ、初代ヲトマン帝ノ開国紀元ヲ隔ツコト殆ンド六百年ニ近シト云。

1月5日(月)(pp.57-58)

トルコ海軍

我等先ヅ Woustafa Nouri, Colonel, Precident^[M](sic) de la Commission de perception ナル人ニ迎ヘラル。氏ガ身体ハ魁偉ニシテ丈長シ。言語清朗ニシテ待遇甚ダ好シ。我国海軍ノ有様ヲ尋ネ大ニ称讃ス。且氏日ク、我土国ハ近来海軍^衰衰弱セリ。最上等ノ軍艦ヲ英国ノ為ニ買ハル。今アル処ノ艦体ハ第二等ニ位セシモノ且古シ。今日製造ニ着手セラルモノアレドモ成就ノ期遠シ。併シ乍ラ現今十五艘ノ鉄艦ハ常ニ備ヲナシテ、^咆咽嗟ノ間ニ用ニ供スルコトヲ得ベシ。其中君等ガ今持ツ比叡ト金剛ノ如キ我ニモ姉妹ノ船舶アリ。一ヲ Mésoudiyé ト云ヒ、他ヲ Hamidieh ト云。前艦ハ三百三十二尺ノ長サ、巾ハ五十九尺アリ、十七年前ニ制功ス。砲ハ十二ニシテ、毎時十三海里ヲ走ルベシ。我海軍ノ人員ヲ問ヒシニ、六人ノ Vaice^(sic) Admiral, 十一人ノ rear-Admiral, 二百〇八人ノ Capitain^(sic), 二百八十九人ノ Vice Capitain^(sic), 二百二十八人ノ Lietenants^(sic), 百十八人ノ Engigns^(sic), 及三万人ノ水兵アリ。此外 Marine ノ数ハ惣計九千四百六十人アリト。

イスラーム教の葬儀

我レ比叡ニ行キ小泉師ヲ訪ヒ、師ハ今日書留ヲ認ムルノ用アリ、上陸シ難シト。仍テ午後我

羅多街ニ向ヒ球院ニ迎ヘラル。今日当処ニ於テ
学士 Atamet 氏ノ葬儀ヲ執行ス、回教ノ典礼
貴僧ノ眼中ニ入ルハ是ヲ矯失トスベシト。遂ニ
雨ヲ冒シテ馬車ヲ得テ須寿井街ノ球院ニ来ル。
死者ハ浅キ箱ニ収メ新浄ノ衣服ヲ着セ令メ、諸
人ヲシテ花ヲ供セ令ム。此頃ノ冬向ニ如此多叢
ノ花ヲ得タル、定テ心配セシナラン。十二ノ老
僧ハ美麗ナル大衣ヲ纏ヒ香蘭ヲ吟ズ。夫ヨリ縁
者ハ交ル交ル死者ノ德行善事ヲ語ツテ出院シ墓
地ニ向フ。六時我ハ仮埋ノ式ヲ見テ帰ル。

後宮

後宮 数百ノ高加索人種ノ婦人ヲ求メテ後
妃トス。其中ヨリ土帝ノ厚愛ナルモノ凡七人
ヲ選テ正妃トス。是ヲ Kadyau ト云。其他ヲ
Odalik ト云。伴妃ノ意味ナリ。七正妃ノ年長
ナルヲ称シテ Haznadar Kadya ト云。我御老
女ノ制ニ似タリ。此老女ハ帝室已内ノコトヲ已
外ニ通ジ、已外ノ事ヲ已内ニ通ズル役柄ニシテ、
老女ハ多ノ宦官ヲ使用ス。宦官長ヲ Kizlar
Agassi ト称シテ老女ト権柄ヲ常ニ争フ由シ也。
此等ノ多クノ後宮ト帝室ノ歳出八年々七、八万
円ヨリ下ラザル由也。

1月6日(火)(p.59)

ギリシャ正教の学校

朝比叡ヲ訪ヒ、同行シテ君街ニ来リ、希臘
教ノ学校ニ迎ヘラル。校長ハ Apex Mixaha
Kvaoboyror 氏ナリ。此学校ハ君都第三ノ大
学ニシテ充分ニ整頓セリ。茶果ノ饗応丁寧ニ
シテ種々必用ナル事件ヲ聞タリ。同校ノ階上ニ
書籍館アリ。数千巻ノ書ヲ蔵ス。欧洲ニスラ希
有ナル書類モ多ク所蔵ストテ館主ガ誇ルヲ聞ケ
リ。アラ比丘又ハ希臘文ノ別序杯ニテハ我等ガ
評者ノ任ニアラズ。奇書珍籍ナルベシト想像セ
シノミ。

宮城

士官 B.F. Iroichta 氏ト正午宮城ヲ訪フ。城
中金ヲ鏤シ、玉ヲ彫シ、驕奢ノ余祐ヲ見ル。同
氏頻リニ室内ノコトニ付説明ヲ附セラレタル
モ、半分ハ不分明ノミナリシ。他日訳官ヲ得テ

再ビ登城スベキヲ約シ、今日ハ帰船ヲ急ギタレ
バ退ク。途次灰土耳伯ノ私邸ヲ訪フニ、伯不在
ニシテ奈伊伯ト少談シテ帰ル。

1月7日(水)(pp.60-61)

観兵式

今日ハ土帝モ寺院ニ参詣セラル、ニ付観兵式
アリ。仍テ寺院ニ至リ閱見ス。土帝ハ四^{〔駆力〕}ノ馬
車ニオスマンパシヤト同乗セラル。九時寺院へ
臨御。帝丈長ガカラザルモ、威光ノ侵ス可ラザ
ルアリ。併シオスマン候ノ方ガ余程体格上ヨリ
スレバ勝レタルガ如シ。

寺院ノ中ニハ種々ナル粧飾ヲ用ヒ、一般ノ日
本人ヲ請シテ二階ニ在ラ令ム。兵ハ球院ノ周囲
ヲ巡回ス。直膝歩行ノ式ニテ、海ヲ傾ケ山ヲ動
ス音楽アリ。清朗ナルガ如キモ、却テ喧騒ヲ覺
ユ。香蘭ノ音声甚ダ高クシテ人ノ神思ヲ裂カン
トス。

兵制の概要

侍士ハ英語ニ通ジテ各国ノ形勢ニ明ナリ。観
兵式中兵制ノ大要ヲ聞ク。土国ノ陸軍ハ Redif
ト Mustahfiz トノ二種ニ分ル。回教信徒ニシ
テ二十才ニ達シ不具者ニ非ラサレバ、誰レモ軍
人タルコトヲ得ト云ヘドモ、前ハ回教不信ノ者
ハ、已前ノ罪ヲ謝スル為其後年々六シユリング
ヲ納ムルトキ、初テ一般ノ軍人タルコトヲ得ル
ト云。今ヨリ三年已前二軍制ヲ改メラレタリ。
サレドモ未ダ全ク僻陋ニ実施ノ期至ラズ。今明
年ノ間ニハ八十万ノ兵士ヲ得ベシ。マタ此国内
惣テ七鎮台^{〔丁底〕}アリ。其一ハ君須底丁堡ニアリ。

アヤソフィヤとスレイマニエ

今日セントソフヒヤト云ヘル球院ニ詣ズ。輪
奘ノ美ナル、古雅ノ模様、実ニ筆紙ニ尽シ難シ。
此球院ハ希臘人ノ建築ニシテ、二千余年ノ昔シ
ヲ見ル趣アリ。大理石ノ椽板、方面ノ壁等、ア
ルモラノ奇石ヲ集メテ成セルモノナリ。球院ノ
下ハ惣テ溜池ニシテ、古代ノ宝物ヲ蔵ス。何分
最古ノ寺院ニシテ、院外ノ北ハ後來土ノ高アリ
シ故、球院ノ下部ハ土石ノ為埋マレリ。

ソレヨリ「シルマニヤ」ト云ヘル他ノ球院ニ

詣ズ。是ハ稍新シ。建築ハ希臘人ノ手ニ及バサルモ、歐洲近代ノ粧飾ヲ写セルガ如キ、素人目ニハマタ粧麗ト云ハン。両院トモ回教僧侶ノ大学トナリ居ルコト故、教授ノ有様ヲ見ルヲ得タリ。併シ残念ナルハ言語ノ不通ナル故、講議ヲ傍聴セシモ了解シ能ハザリシ。

マタ球院ヨリ西北ニ離レテニノ記念碑ヲ見ル。一ハ競馬ノ票トシテ二千二百年前ニ用ラレタルモノト云。其他ノ一ハ阿剌比丘ノ象形文字ヲ以テ彫刻セリ。

1月8日(木)(pp.62-63)

ハマムを体験する

比叡ヲ訪ヒ、小泉師ト共ニ君都ノ方ニ来リ、Mahomet Pasha's hamamu ト云ヘル土耳其湯ニ導カル。門ハ開テ各国ノ文字ヲ以テ湯名ヲ掲ゲタリ。然ルニ日本語ニテ記シタルハナカリシコソ遺憾ナリ。底ヨリ噴出スニモ非ラズ。屋根ヨリ吹込ニモ非ラズ。一種特別ナル方法ニテ、比叡ノ士官ハ三度モ行キテ是ヲ研究セシモ、未ダ分明ナラズト云フ。

先ヅ我等ハ閣樓ノ上ニ導カル。高キ台アリ。押載セラレ裸ニナレバ、幾十枚ノ布巾ニテ全身ヲ包ム。侍童ニ引カレテ閣樓ヲ下リ、広大ナル温室ニ来ル。此処マタ台アリ。侍童ハ我等ヲ臥サシメ、肩ヨリ足ニ至ル迄摩擦ス。香珮アリ、呑ムベク、内外已ニ温度ヲ増ス。此間凡二十分。遂ニ幾十枚ノ布巾ハ一刷キ取ラレ、只一枚ノ衣ヲ着シテ更ニ湯泉ニ近ク。侍童ハ盆ニ草刷毛ト石塩ヲ持来ル。泉頭螺條ヲ操レバ、白水混々トシテ吹き出ヅ。草刷毛ハ体中無限ノ垢ヲ流シ、石城ハ身ヲ揉ミ去ラントス。螺條ヲ右ニ操レバ湯アリ、身ヲ暖ムベシ。左ニ操レバ水アリ、頭ヲ冷スベシ。立テバ大理石鏡ノ如ク身ヲ写シ、坐セバ白液足ヲ没シ、侍童我等ヲ安養ス。夫ヨリ口ヲ清メ齒ヲ研キ、一一潔白ヲ要ス。去テ温室ニ来レバ、侍童マタ数枚ノ布巾ニテ身ヲ包ム。下駄打鳴ラシテ閣樓ニ帰ル。茶料一円ヲ侍童ニ与フ。

此時数名ノ知人ニ逢フ。其中ノ一人曰ク、君

詩アルヤト。予榻上ニ臥シテ漸一絶ヲ得ル。知人已ニシテ湯室ニ入り、出来ル甚ダ遅シ。仍テ吾行先去ル。

是ヨリ西ニ行ケバ下等ノ市場アリ。皆土耳其ノ居民ノミ。北ニ橋ヲ渡テ山ニ昇レバ、此処即英商仏賈ノ住スル処也。風俗習慣全ク反対スルモノ多シ。浴場ノアル市人ハ来リ浴セズ。常ニ垢積テ衣ヲ染ム無浴場処人ハ常ニ来浴身淨。

ペラ街

職工学校生徒 Tenkouta 氏及 Benjendohi 氏ニ逢、同道シテ Pera 街ニ来ル。此街ハ即英人仏人ノ住スル処ニシテ、耶蘇教者ノ住ム処ト云町名アリ。建築頗ル美ナリ。通行ノ人モ重モニ英仏ノ男女ナルガ如シ。書店ニ入り地図一枚ヲ得ル。

番僧の言

球院ノ番僧曰ク、此国程政教一致ノ美ヲ表スル国ハ坤輿ノ間ニ其比ヲ見ザルナリト。英新聞記者ハ、此不都合ナル教法ハ歐洲人ヲシテ土耳其ヲ支那ノ頑惡ナルニ比スルニ至ラ令メシト。何分此国ニハ法律ナルモノハ、香蘭經中ニ宗祖ノ教ヘタル戒律ヲ守ルヲ以テ標準トセルモノナレバ、完全ナル開明ナル一ノ法典ヲモ有セズト云ベシ。且土帝ハ預言者教祖ノ代理者ナリト尊信セラル、モノナレバ、無限ノ権力アルベキ組織ナリ。香蘭經ノ次ニ Multeka ト称スル説明書アリ。是モ法典ノ指南トシテ用ラル、ナリ。各種ノ学校ニ於テ初等ノ教育ハ只此經卷ヲ僧侶ガ音読ノ調子ヲ教ユルニ止ル也。是マターノ香蘭ニ教ヘタル条件ナリ。是等ノ事ニ関スル利害ハ真ニ我党ノ一考スベキ価アル問題ナリトス。

1月9日(金)(pp.64-65)

観兵式

回教ノ例祭日ニシテ耶蘇教ノ日曜日ノ如シ。士官ハ已ニ土帝ヨリ得タル勲章ヲ佩用シ、水兵ノ一部モ已ニ救難章ヲ附ケテ球院ニ趣ク。土帝ハオスマンパシヤト同乗シテ、九時救助院ノ前ヨリ寺院ニ臨マル。観兵式アリ。楽隊例ノ如ク我等ノ耳ニハ喧敷ノミ。

午前船ヲ得テ亜細亜土耳其ニ至ル。陸軍ノ別省アリ。長官其他ノ諸員ヨリ種々必要ナル事件ヲ聞ク。

キャメル・パシャの病院

Camel Pasya ノ病院ヲ訪フ。院長出迎ヘラレ曰ク、君等ガ来訪ヲ待ツコト日久シトテ、諸方ノ病室ヲ初メ種々報告書ヲ一見セシメラル。橙ノ大ナルヲ瓶ノ小ナルニ入レテアルヲ贈与セラル。忝キ院長ノ注意ナリトテ是ヲ受ケ帰ル。

軍馬局

軍馬局ニ導カル。Hamahtin 大佐ニ逢ヒ響応ヲ受ク。言語少シク不通ヲ感じ、説明中ニ不明ナル処アリシ。

トルコ軍事史を聞く

エチラ大佐ハ年来ノ軍史ヲ話シ、カスミヤン僧ハ戦中教導ノ模様ヲ我等ニ語り、互ニ愉快ヲ覚ヘタリ。ア、土耳其ハ年来軍門多事ノ域ニアリ。先今日ハ欧洲諸国ノ平均力ヨリ自身ノ独立ヲ持ツガ如キ観アリ。

千八百六年ニ魯西亜ト戦ヒ勝利ヲ得タリ。八百十二年ニ條約成リ、八百二十二年ヨリ六年ノ間苦心苦戦ノ結果ハ希臘ノ独立ヲ許スコトナリ、八百三十三年ニハ魯西亜ノ干渉ニテ、埃及ノ Mahmet Ali Pasha ヲ捕ヘシモ、土耳其ノ權威ハ有名無実ノ貢主トナリ、八百四十一年ニハ自分ノ独立モ各強国ノ條約ノ下ニ保護ヲ受クベキ必用ヲ生ジ、八百五十四年ニマタ魯西亜ト戦争シ、無残ノ不覚ヲ取りタリシ。八百五十八年ニハモルダウヤ及ワッラチャ地方ノ領地ヲ許シテ不得已独立セシメ、八百七十六年ニハマタマタ魯西亜ト戦争起リ多ノ地面ヲ掠奪セラレ、澳大利ハボスニヤ及ハルゼゴビナノ両地ヲ奪ヒ、英吉利マタサイプルス島ヲ占領ス。ア、カ、ル軍門多事ノ間ニ生長セシ土耳其ノ軍人ハ、慷慨悲憤切思扼腕忠死等ノ覚悟ハ夢ニモ知ラズ、偷安^{〔暫〕}安息一日ノ大平ヲ喜ブガ如キハ、実ニ吾筆ノ憫ヲ感ズル処ナリ。

予ガ半夜此等ノ軍史ヲ水兵ニ話セシ時、日本ノ義士ガ不便ノ涙ヲ異郷ニコボシタルハ蓋シ此ヲ初メトセンカ。月ヤ光ヲ没シタリ。雨ハ少々

降り来リ、舷宵時ニ潮流ノ音ヲ聞ク。予ハ今日此外ニ聞取タルカスミヤン僧ノ軍中伝導^{〔ママ〕}ノ有様ヲ灯下ニ是ヲ筆写シテ、郷里ノ知人ニ送ルコト、セリ。

1月10日(土)(pp.66-67)

ジンマーハとの論議

回教僧法心師ト球院ノ層楼ニ論議ス。師曰ク、仏教中隨方毘尼ノ説アリト、真ナリヤ否ヤト。予真ナリト云。師曰ク、然ラバ、支那ノ仏教、日本ノ仏教、満州、西藏、各隨方ノ教制アルガ如シ、是ヲ仏法ト忽称スルハ甚ダ穩ナラザルニ非ズヤト。予曰ク、是教法ノ大体ヲ変更スルニ非ズシテ、寒温処ヲ異ニスレバ、外形枝末ノ局部ニ於テ隨方ノ制アルナレバ、凡ソ一般ニ仏法ト云ヒテ碍ゲアランヤト。師ハ夫ヨリ凡十余ヶ條ノ問ヲ贈リ、説明ヲ請ハル。此法心師ハ余程注意深キ人ニテ、実ニ感心ナル説ヲ吐クコトアリ。

寺院省大臣に会う

今日 Evkat 大臣、即寺院省ノ卿ニシテ、The minister of Foundations Pieusesニ逢フ。卿ハ種々必用ナル取調上ノ材料ヲ示サレタレドモ、多クハ仏文ニシテ伝訳セザレバコ、ニ示シ難シ。□憾□□。

国勢データ

日本全国方里	147,526,
土耳其全国方里	1652,533,
日本人口	39,069,007,
土耳其人口	33,359,787,

此統計比較ヲ以テ見レバ、実ニ土耳其ハ大国ニシテ驚クベキモ、其人口ニ至テハ、我邦ノ人口遙ニ多キヲ見ルベシ。又首府ノ人口ヲ比較セバ、

我東京ノ人口ハ百十六万五千〇四十八人。

君須丁堡ノ人口ハ八十七万三千五百六十五人。此内ニハ亜細亜区ヲ除ク。

スミルナ府ノ人口ハ二十万人余。

メッカ市ノ人口ハ四万八千余人。

君須丁底堡市民ガ宗教ヲ区別セル表ヲ得タレバ是ヲ掲グ。併シ阿細亜区ヲ除ク。

1 Mussulmans	384,910,
2 Greeks	152,741,
3 Armenians	149,590,
4 Bulgarians	4,377,
5 Roman Catholics	6,442,
6 Greek Latins	1,082,
7 Protestant	819,
8 Jews	44,361,
9 Foreigners	129,243,
Total	873,565,

若此表ヲ見ルトキハ新教及羅馬旧教ノ少数ナルニ驚クベキモ、第九項ニアル外国人ノ教法家ト云、十二万九千二百四十人ナルモノハ、即此二教ニ□スルモノナレバ、意外ノ大数トナルベシ。何分歐洲土耳其ハ此二教ガ過半数ノ宗教ナリ。是ニ反シテ阿細亜土耳其ハ回教家ガ十中ノ九分八厘迄ニ当ルベシ。

1月11日(日)(pp.68-69)

カトリックの学校

知己ヲ第三橋ノ許ニ尋ントテ、小泉師ト行クコト凡二里斗リ、然レドモ尋ネ当ラズ。仍テ帰路ニ羅馬教ノ学校ヲ問ヒシニ、最近ノ地方ニアリ。仍テ歩ヲ同校ニ曲テ、校長及校員諸氏ガ熱心ナル談話ヲ聞キ、丁寧ナル饗応ニ逢フ。

翁と語らう

瓶良街ニ来リ、小泉師ガ皮箆ヲ求メラル、ニ逢フ。夫ヨリ同行シテ、マタ行クコト半里。王宮ヲ訪ヒ小尅ニシテ出テ、球院前ノ波止場ニ来ラントス。時シモ、頗^頻リニ後ロヨリ頻リニ呼ブ声アリ。首ヲ回ラシテ仰ギ見レバ、宮中ノ一翁ニシテ、童ヲ馳セテ予輩ヲ迎ヘシム。歸リ至レバ老翁白髯ヲ撫リ談話数時ニ渉ル。種々ナル菓子ヲ運ビ来テ厚情尤モ挙動ニ^顯ハル。翁明日吾等ガ雙艦ニ訪問シテ残話ヲ□□ベシト約ス。仍テ日暮宮ヲ辞シテ帰船ス。

行政組織

行政司法ノ大権ハ元ヨリ蘇丹帝ノ専断ニアリト云ヘドモ、種々ノ改良行ハレ、目今ノ処ニテハ、帝ハ必ズ二大主任者ノ意見ヲ聞キ、二大主

任者ヲ經テ政務ヲ執行スル憲法ニ従ヘリ。即其二大主任者トハ、一ハ Sadr-azam ト云ヒ、内閣惣理ノ大臣也。マタ他ノ一ハ Shek-ul-Islam ト云ヒテ、回教全部ノ管長ナリ。共ニ帝ノ親任ナリ。併シ此管長ハ Mufti ナル官吏ヲシテ香蘭ノ翻譯者タラ令メ、自分ノ名ヲ行政司法ノ実権ニ用フルノミ。内閣ハ是ヲ Medjlissi Hass ト云ヒテ、十三人ノ大臣ヲ以テ組織セリ。即其十三人ハ 1.The Sheik ul Islam 即回教全部ノ管長ナリ。2 The Minister of the Interior ; 3. The Minister of Foreign Affairs ; 4.The Minister of War ; 5 The Minister of Finance. 6 The Minister of Marine ; 7 The Minister of Commerce ; 8 The Minister of Public Works; 9 The Minister of Justice; 10 The Minister of Public Instruction(sic) ; 11 The Minister of Foundations Pieuss(sic) ; 12 The President(sic) of the Council(sic) of the State ; 13 The Grand Master of Artillery

法心師日ク、回教僧侶ハ宗教ノ理事者ナルト同時ニ Professor, 而シテマタ The interpreter of the Government Lord.

1月12日(月)(pp.70-71)

翻訳省とモイゼ中佐

小泉師ト共ニ翻訳省ニ導カル。同省ニハ奈尹伯アリ。Moize ト云ヘル中佐アリ。中佐ハ英語ヲ語ル余程巧ミナリ。且ツ氏ハ土耳其雑誌ノ記者ニシテ、生等ヲ要シテ阿弥陀仏及釈迦如来ノ歴史ヲ学バントス。已ニ氏ノ著セシ書籍数部アリ。ミナ東洋ニ関ス。日本ノ婚姻及後宮ノ事ニ関シ氏ガ論余程実ヲ穿テルモノアリ。

離宮の莊嚴

氏ハ充分生等ノ饗応ニ注意シ、夫ヨリ離宮ノ数棟ヲ案内セラル。粧嚴ナルコト驚クニ堪タリ。真珠宮ニ入レバ、満目ノ光リハ皆壁上ノ画ヲ彩セル真珠ノ玉光ナリ。珊瑚宮ニ入レバ、マタ惣テ珊瑚ノ珠ノ光リニ非ラザルナシ。数室ヲ見去レバ、廊下廊上金紙ヲ粘リ、眼光暗ラフシテ正

ニ眩セントス。アハ、是疲弊ノ極ニアル土耳其トハ誰レガ評スル処ナルヤヲ疑ハシム。併シ士官ガ受クベキ俸給ハ二月、三月ノ延引^[宛]アルハ通常ノコトナリト聞クトキハマタ疲弊衰弱ノ□ナルヲ知ル。サレドモ欧州各帝室ノ歳入ヲ比較セバ、土帝ガ受クル処ハ英皇仏主ヨリモ尚多キヲ知ル。民ノ血涙ハ帝室ノ酒池。

ハッサン候とウッド候

中佐ノ紹介デ離宮ニ於テ Hassan 候及ビ Wood 候ニ逢フ。木候ハ英人ニシテ、今土国ニ帰化セラレシ也。日本ニ航セシコト已ニ三回ナリシト云ウ。大名ガ予ヲ威シタルコト、専岳寺ノ近辺ニテ攻撃セラレタルコト杯語リ出デ、随分我邦ノ事情ニ通ゼリ。木候忽チ案ヲ打ち、日本ノ歌ヲ唱フテ一笑セシム。

海軍省とアイザック大佐

夫ヨリ奈尹伯ト共ニ海軍省ニ至リ、伯ノ父ニ逢ヒ、色々ノ饗応ヲ受ケ、去テ同省属ノ電氣局ニ至リ、電氣ノ試験ヲ一覽ス。又造船局ニ導カル。其処ニハ Aizakk(sic) 大佐アリ。英人ニシテ帰化セラレタルモノ。氏ガ案内ニテ図室、模型室ニ至ル。氏曰ク、我在英ノ前日本政府ノ命令ニヨリ扶桑艦ノ設計ヲナセリ。此国ニ来テ已来日夜造船ノ業務ヲ把リ、漸ク扶桑ニ似タル艦ヲ製造セリト。

茶楼に入る

阿理伯ノ誘引ニヨリ、舟ヲ金角湾ノ西ヨリ浮ベ、土耳其ノ茶楼ニ入ル。種々甘味ノ食ヲナシ、去テ蒸気船ニ乗り、我東艦ニ帰ラントス。艦長賃銭ヲ辞シテ曰ク、土帝ハ定期航海ノ汽船ニシテ日本人ヨリ価ヲ徴集スベカラズ、惣テ賓客ヲ以テ待遇セヨト達セラル、我等敢テ貴僧等ガ無料ノ通過ヲ喜ブモノナリト。

1月13日(火) (pp.73-74)

軍楽学校で軍楽を聴く

軍楽教養ニ導カル。饗長及其他ノ饗応ニ逢フ。直ニ楽隊数百名ヲ集メ、教師ハ囲ノ中ニアリテ七、八曲ヲ聞ク。甚ダ快味ヲ覚ユ。曲了レバ我等ヲ引テ饗中ノ球院ニ導ク。感心スベキナリ。

ヌリ・オスマニヤ離宮

次ニ Nuri Osmaniya ト云ヘル離宮ニ臻ル。此ハ惣テ金箔ノミニテ粧飾セラレタルコト故、美ハ美ナレドモ、一ノ雅ナキヲ遺憾トス。衛士窓張ヲ掲グレバ、全都ノ風光眼下ニ集リ甚ダ眺望ニ富メリ。

オリエンタル・ホテルでトルコ料理を食す

同離宮ヲ出デ、小泉師ト共ニオリエンタルホテルニ行キ、土耳其料理ノ純ナルモノヲ試ム。数種アリテ味ヒハ日本人ノ口ニ適ス。併シ寒暖共ニ一皿ノ間ニ雑ハルハ蓋シ感服シ難キ処ト評スベシ。

博物館でミイラと仏像を見る

午後二時、貧院ヲ見訪フ。是回教ノ救護スル処也。同門内ヨリ左ニ折レテ進メバ、名高キ希臘及阿剌比亞ノ博物館アリ。一覽スルニ古物古器品、先ヅ歴史的ノ眼ヲ以テスレバ随分値打ノアルベキモノアリ。西洋近代ニ美術杯モ是ニハ及ブマジキト思ハル、大ナル威厳ヲ見セル石像杯アリ。一室見尽シ、一室ニ満ル人間ノ古体、即掘出シモノヲ見ル。聞ク、千八百年代ノ古人ナリト。布ヲ以テ覆ヒ、顔ト手トノ枯皺^[カ]セル処ノミ見ルヲ得ベシ。小兒ノ干物。是モ同様ノ古人ナリ。

見了見来リーノ小室ニ至ル。古代ノ神体ノ怪シキモノヲ排列ス。其中ニーノ大理石の箱アリ、中ニハーノ石像アリ。ヨク見ルニ、不思議、不思議、是ハコレ我尊重スル釈尊ノ坐像ニシテ、形ハガールグネラトネ氏ノ蔵スル縮甸^[縮]ノ仏像ニ似玉ヒ、御丈ケ凡一尺二寸、金箔ヲ□セル袈裟ヲ着シ□リ、何カ由来セルコトアルベシトテ種々尋問シタルニ、何ノ手懸リモナシ。カヽル異郷ノ地ニ此仏像ヲ拝シ上ルコトハスコシモ思ヒ設ケザリシ故、博物場トモ思ハズ我ヲ忘レテ歎仏ノ偈文ト一首ノ和讃ヲ誦シ、足ハ覚エズ念仏ノ声ニ止メラレシ。

1月14日(木) (pp.75-76)

回教法制部の委員に讃えられる

独り上陸シテ回教法制部ノ委員ヲ見ル。諸士

日ク、聞ク、日本ノ軍民規矩正確、一令ト云ヘドモ宏重ニ遵行セラレザルナク、各国ノ兵士此一点ニ於テハ君等国民ニ数歩ヲ遅ルト。我等ハ信ズ、貴僧等ガ艦中伝道ノ実功ハ全ク此好評ヲ得タルコト、我部内已ニ此コトヲ論定セリ。羨ム、君等カ良名ヲ得テ万国ニ遂ニ其挙ヲ伝ヘルコトヲト。我汗顔、蓋シ此語ヲ聞テ一層奮発スベキヲ誓フ。

モイゼ大佐より銀印を贈られる

翻訳省ノ大佐来リ、我等ニ銀印一個ヅ、贈ラル。印ニハ土耳其文字ヲ以テ法彦ノ二字ヲ彫尅セリ。氏曰フ、此地印尅者星ヨリ多シ、併シ此印ヲ尅セル如キ巧手ハ此国ニ二、三ノミ、^[南]斬カ君ノ為ニ予ガ婆心ヲ弁ズト。而シテ明後日氏ガ私邸ヲ訪ハンコトヲ請ハル。我等是ヲ諾ス。氏星ノ旗船ニ乗ジテ去ル。

モスク自慢

此国ノ人ハ余程回教ノ諸球院ヲ以テ外国人ニ誇ルト見ヘ、異色人種ヲ見レバ、「コーラマデヤー…」ト呼ブ。即彼等ハ球院ヲ拝セントテ遠国ヨリ来リシモノト云意味也。我モ着都已来如此評セラレタルコト、幾回ナルヲ知ラズ。今日モモイゼ大佐ガ、君ハ已ニ府内ノ諸球院ヲ一覽シ了リシカト問ハレタル故、我ハ惣計府内ニ何ヶ寺アリヤト云シニ、氏ハ手帳ヲ見テ、三百八十ヶ院アリト云シ故、我ハ^[南]恰ンド其十分ノ一ヲ見タリト答ヘシニ、氏ハ夫ハ甚ダ不都合也、予ハ兩三日君等ノ為ニ案内シ、三百八十余ヶ寺等ヲコトゴトク参詣セザル可ラズト。

イスラーム法学者（ウラマー）

聞ク、君都ノ教師ハ甚ダ品行方正也ト。全帝國寺院ノ惣数ハ二千一百二十院ニシテ、此等ノ球院ニ居スル僧侶ハ一万一千六百人アリト云、ミナ Sheik-ul-Islam ナル管長ノ支配ヲ受クルノ制也。而シテ此管長ハ国王ノ特別ナル差図ノ別ハ世襲シテ相続ス。一万一千の僧ガ、英語の Priest ナル特別ノ意味ヲ以テ考レバ、決シテ一人モ真ノ Priest ナルモノハナカルベシ、何故ナレバ、其名ハ神人ノ關係特殊ノ階級ヲ意味スレドモ、彼等ハ一人モルコトナシトハ、英人

スコット氏ノ説ナリ。

1月15日（木）(pp.77-78)

チャールズ・ブルックスに会う

今日少シ雨アリ。仍テ小泉師マタ同行セラレズ。不得已独リ Marpommateache 氏ヲ訪ヒ、音楽、唱歌、饗応、甚ダ丁寧ナリシ。同席ニテ米人ノ宣教師ニ逢フ。Rev.Charles H Brooks ト云。氏ハ故新島^[南]讓ノ親友ナリト云。氏ノ令閨ハ英仏独ノ語ニ通ジ、此頃マタ土耳其語ヲ学ビ居ルト語レリ。チャーレス氏ガ、予ガ親愛セシ Jhon（讓氏ガ在米中ノ字）ハ、不幸ニシテ大事ヲ成就セズシテ鬼籍ニ就ケリト云ヒシニ、同夫人ハ直ニ「シラスーケエマック」ト云ヘリ。是ハ土耳其語ニシテ、否、大幸ニシテ今ハ天堂ニ樂シムナラント云意味ナリ。

モスクの収入

シンガーニ球院ノ住持ニ逢フ。氏ハ一語モ外国語ニ通ゼズ。サレドモ能ク外国ノ事情ニ通ジタルハ感心ナリ。氏ハ、球院一般ノ財政ノコトニ関シ、年来大改革ヲ実行セント^[マ]企望セリト語レリ。此国ニ於テ寺院所属ノ小学、我寺子屋類似ノモノ一千七百八十余校アリ。千八百七十八年ノ戦争前ニハ寺院ノ惣歳入、即政府ヨリ領納セシ金額ハ、年々実ニ三千〇二十万比安太ナリ（251000 £）一^[本]比安大ハ一^[リ]里良ノ百分ノ一ニ当ル。而シテ一里良ハ英ノ十八朱ト少シ余ニアタル。此七十八年ノ戦争後ハ国費節減ノ為メ二千^[本]万比安大（即 166000 £）トナレリ。コレヲ内訳スレバ、

{	The stipend of the Sheik-ul-Islam	
		7,031,520 Piastres
Naibs & Muftis	
		7,876,646 Piastres

Total トシテ政府ヨリ年々払ヒ渡サレシ□ハ 15,000,000, 比安大也。

妙ナ収入法アリ。即寺院ハ地所ヲ売りテ其代金ヲ請取テ支出ス。尔ルニ其地所ハ買主ガ死スル時ハマタ寺院ヘ返納スベキノ慣行アルナリ。是ヲ輪展無尽ノ財本ト云。併シ富祐ノ信者ハ是

ニ非トモ此一時売ノ地所ヲ時ノ相場ニ買ネバナ
ラヌ。習慣ニ支配セラル、間ハ先結構也。

昨年ノ間ニ政府ヨリ払ハレタル支出ノ綱目ハ、
1 The Expençe of Pilgrimage to Mecca
and & Present

13,139,529, Piastre or 109000 £

2 The Public reading of the Koran

12,747,395, or 105000 £

3 Sutrention(sic) to Monasteries

776,250, or 6500 £

如此政府ノ保護厚キニ過ギ、却テ教家ノ油断
ヲ生ジタルコトハ我国ニ鑑ミテ知ルベシ。

おわりに

本稿においては、まず軍艦に便乗してコロ
ンボからイスタンブルに旅立つまでの善連法彦の
経歴を明らかにし、続いて善連の『土耳其行紀
事』よりイスタンブルでの見聞記を抄録した。

この見聞記からは、善連、そしてまた小泉了
諦が、連日イスタンブルの街々を好奇心に目を
輝かせながら歩き回り、様々な施設を見学して、
時に言葉の壁を感じながらも、多くの人々と積
極的に交流したこと、また彼らを迎えたトルコ
人たちが、この「異教の教師」たちをエルトゥ
ール号の生存者たちを送り届けるために来航し
た日本使節団の一員として大いに歓待したこと
が知られる。

この記録を通じて善連が伝えるトルコ・イス
タンブル事情は、個人の住宅の作り、宮殿・モ
スクの壮麗さ、オスマン皇帝、海軍の組織、イ
スラーム教の葬儀、ハレム、各種の学校・役
所、観兵式、兵制の大要、ハمام体験、街区と
住民、政教一致、近代の軍事史、ウラマーとの
対話、国勢データ、政府の行政組織、軍楽、料
理、博物館の展示物、全国の寺院数とウラマー
数、寺院の収入など多岐にわたる。これらの情
報が19世紀末のトルコを伝えるものとしてど
のような特徴と価値を持つかについては、今後
他の資料と比較しながら検討したい。

<注>

¹ 『西游見聞記』について前稿[奥山 2009]では『明
教新誌』に連載されたものをを用いたが、本書はそ
の後国立国会図書館所蔵本が「近代デジタルライ
ブラリ」の一冊としてウェブ上で公開されるようにな
った。本稿ではこれを用いることにする。なお、『西
游見聞記』はその後の欧州行、インド・セイロン行
の記録も含んでいる。善連にも「欧洲英仏行の部」
があったと見られるが、今のところ参照し得ていな
い。

² 善連法彦の略伝に、南條[1901]と「渋谷学
匠略伝」[物部 1915: 397]の「法彦」、『越
前人物志』中巻[福田編 1910: 225-227]の
「善連法彦」、『仏教大辞彙』第6巻[龍谷大学
編 1922: 4107]の「ホウゲン 法彦」、『真
宗人名辞典』[柏原・藺田・平松監修 1999:
342]の「よしつらーほうげん 善連法彦」の諸
項がある。また行信教校(注6参照)所蔵の「明
治入校人名簿」には善連の頁があり、そこには彼
の履歴が略記されている。

³ 注2前掲「渋谷学匠略伝」、『仏教大辞彙』、『真
宗人名辞典』はいずれも、善連の生年月日を元治
元(1864)年4月25日とする。しかし仏照寺には、
彼の法名、号、字とその出典、さらに花押などが
記された「明治9年丙子1月 七十九翁薫華閣考」
の署名入り度牒が残されており、そこには彼の生年
が「慶応元年乙丑」と明記されている。本稿では
これに従い、かつ「渋谷学匠略伝」以下の諸伝
が彼の誕生日を4月25日とすることに何らかの根
拠があると推定して、彼の誕生を1865年中とし
ておく。なお薫華閣とは仏光寺派の僧侶草名信円
(1798-1884)の号である。

⁴ 1889(明治22)年にコロンのウィドヨードヤ・
ピリウェナで善連に会った郵便報知新聞社の藤田
茂吉(1852-1892)は、どういう訳か、彼を「山
城の宇治の人にて幼時釈門に入りて善連と呼び昨
年此地に來りて仏学を研究せる由にて」と紹介し
ている[明教新誌 1889: 6]。無論善連は宇治出
身ではない。

⁵ 仏照寺所蔵の度牒(注3参照)の日付に従う。ま
た、行信教校所蔵の「明治入校人名簿」(注2参
照)には、「明治九年一月十五日得度」とある。
なお『真宗人名辞典』[柏原・藺田・平松監修
1999: 342]が彼の字を宏遠とするのは誤り。

⁶ 行信教校所蔵の「明治入校人名簿」(注2)に
よる。行信教校は、1882(明治15)年、富田
村の浄土真宗本願寺派本照寺の境内に利井妙朗
(1832-1918)、利井鮮妙(1835-1914)

兄弟等によって設立された本願寺派の僧侶養成機関である。1886年に嶋上郡如是村東五百住（現高槻市）の常見寺境内に移転して現在に至っている。

- ⁷ 『真宗人名辞典』〔柏原・藺田・平松監修 1999: 342〕を参照のこと。
- ⁸ 善連の哲学館在学は、「東洋大学同窓一覧」（1966）、『哲学館明治三十年度報告』（1897）より確認できる。その期間は1887年中と見るのが妥当であろう。
- ⁹ 善連を指して、令知会雑誌〔1888h: 244〕に「氏は南條文雄師の北堂（神興師未亡人）の姪なり」とあり、南條〔1901: 9〕に「君の母氏は余が義母の姪なり」とあることに拠る。美濃国大垣の誓運寺（溪）英順（1818－1883）の三男に生まれた南條（幼名格丸、格順）は、1871年、数え年23歳で越前国南条郡金柏村（現福井県南条郡南越前町）の憶念寺（南條）神興（1814－1887）の養嗣子となり、同年東本願寺で得度して文雄と改名している。神興の妻であった南條の義母寿光院智登尼（？－1900）が善連の母のおばに当たるのである。
- ¹⁰ この名称は、外務省ホームページの「外交史料Q & A 明治期」が正式とするものである。『日本外交文書』〔外務省調査局 1947: 186-189〕では「修好通商ニ関スル日本国暹羅国間ノ宣言」とされる。また「日暹修好通商に関する宣言」、「修好条約締結方ニ関スル日暹宣言書」とも呼ばれる。
- ¹¹ 彼の名はPhya/Phaya Bhaskarawongseとも綴られる。当時の新聞記事では、「フィヤ、バスカラワングス」〔明教新誌 1888a: 6〕、あるいは"Le Phya Bhaskarawongse"〔明教新誌 1888b: 3〕と伝えられている。これらのことは、当時の彼の称号がPhrayaのであったことを示唆する。この人物については、石井監修、石井・吉川編〔1993: 266〕を参照のこと。
- ¹² 両会談の内容は〔令知会雑誌 1888b〕と〔令知会雑誌 1888f〕「暹羅大使問対略記」として記録されている。
- ¹³ 詳しい経緯については〔明教新誌 1888e〕と生田〔1891: 11-12〕を参照のこと。
- ¹⁴ 生田が唱えた三部仏教については、奥山〔2008: 2013〕を参照のこと。
- ¹⁵ 1871（明治4）年、メリケン波止場近くの海岸通に、イギリス人メアリー・グリーン（Mary E. Green, 1835-1881）によって開かれたホテル。cf. 平成24年度神戸みなと知育楽座Part4第5回講演概要：谷口良平「神戸、みなとを愛した外国人

～ヒョウゴホテルの美しい経営者メアリー・グリーン～」（http://www.geocities.jp/npominato/minatotiikurakuzapart4.html#jump_sakil, 2015年1月8日閲覧）

- ¹⁶ 〔令知会雑誌 1888c〕には、大使の東西本願寺訪問記に加えて、「同大使は殊に南條師に面会したるを喜ばれ屢々往来して懇に談話せられたりといふ」とある。
- ¹⁷ 興然と宗演のセイロン留学については、奥山〔2004; 2008; 2013〕を参照のこと。
- ¹⁸ 1881年に開業した外国人向けのホテル。株式会社京都ホテル〔1988〕を参照のこと。
- ¹⁹ 以上、大使の京都訪問に関する記述は〔明教新誌 1888f〕に拠った。
- ²⁰ 二人のうち山本安太郎に関しては、外務省外交史料館所蔵の外務省記録の中に明治26～28年の徴兵猶予関係の書類（レファレンスコードB07090129600）が存在する。それによれば、安太郎はいずれの年も「ヒヤスカラオンクス方寄留」で、明治26年には「暹羅国盤谷府スワーワークラブ学校生徒」、明治27年には「暹羅国官立リユハークーラアフ学校生徒」、明治28年には「暹羅国官立リユークラブ学校生徒」となっている。
- ²¹ 善連〔1891a〕によれば、セイロン着は7月9日であるが、彼が1890年の日記の余白に明治21年のこととして「7 25 発暹羅, 8 9 着楞伽」と記録しているのに従い、8月9日としておく。
- ²² 〔反省会雑誌 1890b〕を参照のこと。
- ²³ このことについては、2012年2月19日に東北大学東北アジア研究センターシンポジウムでの発表「河口慧海による梵語・チベット語仏典の収集とその意義」の中で一度指摘した。これに基づく同題の原稿は、2015年度中に東北大学東北アジア研究センターから刊行される予定である。
- ²⁴ 軍艦の便乗者として小泉と善連が選ばれた経緯については、奥山〔2008〕を参照のこと。

< 参考文献 >

- 浅野研真〔1938〕『日暹仏教交渉史考』仏陀社。
 生田得能〔1887〕「仏教ノ大勢ヲ論ス」〔令知会雑誌〕38: 127-135。
 生田得能〔1891〕「生田得能自伝」、生田得能『暹羅仏教事情』所収。
 石井米雄監修、石井米雄・吉川利治編〔1993〕『タイの事典』同朋舎出版。
 石井米雄・吉川利治〔1987〕『日・タイ交流六〇〇年史』講談社。

- 奥山直司 [2004] 「ランカーの八僧—明治二十年代前半の印度留学僧の事績—」『仏教文化学会十周年・北條賢三博士古稀記念論文集 インド学諸思想とその周延』山喜房仏書林, pp.86-103。
- 奥山直司 [2008] 「日本仏教とセイロン仏教との出会い—積興然の留学を中心に」『コンタクト・ゾーン Contact Zone』002, 京都大学人文科学研究所・人文学国際研究センター, pp.23-36。
- 奥山直司 [2009] 「明治インド留学生たちが見た『比叡』と『金剛』の航海」、『(東洋大学) アジア文化研究所研究年報』43: 65-81。
- 奥山直司 [2013] 「明治インド留学生—興然と宗演—」, 田中雅一・奥山直司編『コンタクト・ゾーンの人文学 第四卷—Postcolonial / ポストコロニアル—』晃洋書房, pp.229-257。
- 外務省調査局編 [1947] 『日本外交文書』第20巻, 国際連合研究会 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/archives/DM0002/0001/0020/0446/index.djvu>), 2014年10月5日閲覧)。
- 柏原祐泉・藺田香融・平松令三監修 [1999] 『真宗人名辞典』法蔵館。
- 株式会社京都ホテル [1988] 『京都ホテル 100 年ものがたり』株式会社京都ホテル。
- (小泉了諦著,) 中山義樹編 [1893] 『西游見聞記』中山義樹。
- 小泉了諦 [1916] 『修道逸話 六十六年夢物語』顕道書院。
- 南條文雄 [1901] 「印度留学沙門善連法彦君略伝」『帝国東洋学会会報』1: 9-12。
- 反省会雑誌 [1890a] 「印度留学の諸兄に望む」『反省会雑誌』5-7, pp.1-7。
- 反省会雑誌 [1890b] 「両留学生の帰朝」『反省会雑誌』5-11, p.34。
- 福田源三郎編 [1910] 『越前人物志』中巻, 玉雪堂。
- 明教新誌 [1888a] 「暹羅国特命全權大使参内」『明教新誌』第2318号, 1888/01/26, p.6。
- 明教新誌 [1888b] 「日暹宗教上の交際」『明教新誌』第2326号, 1888/02/14, pp.3-5。
- 明教新誌 [1888c] 「日本僧暹羅大使を訪」『明教新誌』第2326号, 1888/02/14, p.5。
- 明教新誌 [1888d] 「日暹宗教上の交際(前号の続き)」『明教新誌』第2327号, 1888/02/16, pp.3-5。
- 明教新誌 [1888e] 「生田得能氏」『明教新誌』第2328号, 1888/02/18, p.5。
- 明教新誌 [1888f] 「暹羅国大使」『明教新誌』第2335号, 1888/03/04, p.7。
- 明教新誌 [1888g] 「生田得能氏」『明教新誌』第2338号, 1888/03/12, p.8。
- 明教新誌 [1888h] 「暹羅国布教」『明教新誌』第2338号, 1888/03/12, p.8。
- 明教新誌 [1888i] 「暹羅留学」『明教新誌』第2340号, 1888/03/16, p.5。
- 明教新誌 [1889] 「周遊艸」『明教新誌』第2560号, 1889/06/26, pp.5-7。
- 明教新誌 [1891a] 「善連法彦氏」『明教新誌』第2894号, 1891/05/24, pp.5-6。
- 明教新誌 [1891b] 「善連法彦氏」『明教新誌』第2895号, 1891/05/26, pp.5-9。
- 明教新誌 [1891c] 「仏蘭西人の報恩講」『明教新誌』第2897号, 1891/05/30, pp.9-10。
- 明教新誌 [1891d] 「仏蘭西人の報恩講(承前)」『明教新誌』第2898号, 1891/06/02, pp.5-7。
- 明教新誌 [1891e] 「仏蘭西人の報恩講(前号のつゞき)」『明教新誌』第2899号, 1891/06/04, pp.5-6。
- 物部長寛 [1915] 「渋谷学匠略伝」, 妻木直良編『真宗全書』続編第18巻, 蔵経書院, pp.392-397。
- 龍谷大学編 [1922] 『仏教大辞彙』第6巻, 富山房。
- 令知会雑誌 [1888a] 「島地寺田平松三氏暹羅大使を訪問す」『令知会雑誌』47: 116-117。
- 令知会雑誌 [1888b] 「暹羅大使問対略記」『令知会雑誌』47: 122-127。
- 令知会雑誌 [1888c] 「サイアム大使」『令知会雑誌』48: 173-174。
- 令知会雑誌 [1888d] 「サイアム留学」『令知会雑誌』48: 177。
- 令知会雑誌 [1888e] 「生田氏香港より島地氏へ書信の抄略」『令知会雑誌』48: 178-179。
- 令知会雑誌 [1888f] 「暹羅大使問対略記第二」『令知会雑誌』48: 185-191。
- 令知会雑誌 [1888g] 「暹羅通信」『令知会雑誌』49: 235-237。
- 令知会雑誌 [1888h] 「善連法彦氏」『令知会雑誌』49: 244-249。
- 令知会雑誌 [1888i] 「暹羅通信」『令知会雑誌』51: 368-373。
- 令知会雑誌 [1888j] 「汚南條文雄師重児碧行芳韻賦暹羅行, 遇成」『令知会雑誌』51: 374-377。
- 令知会雑誌 [1888k] 「暹羅皇帝寄贈」『令知会雑誌』52: 417。
- 令知会雑誌 [1888l] 「暹羅通信(前号の続き)」『令知会雑誌』52: 418-421。
- Okuyama Naoji [2008] "Tibetan Fever among Japanese Buddhists of the Meiji Era." In Monica Esposito(ed.), *Images of*

Tibet in the 19th and 20th Centuries, vol.1,
Paris: École française d' Extrême-Orient,
pp.203-222.

*善連法彦，東温譲に関わる貴重資料を提供して下さいました善連昂師（福井市仏照寺）、東晃雄師（宇城市円光寺），学校法人行信教校，東洋大学井上円了研究センター・三浦節夫教授（東洋大学），神戸海洋博物館に心より御礼申し上げます。

（客員研究員・高野山大学教授）